

ほのぼの

第66号

令和6年

3月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



その先に何を見えていますか

前住職

知らぬ間に年をとっています。年を重ねるごとに身体も心もかたくなり、頭も行動もスローで鈍くさい。心もかたくなになって頑固です。おかげさまで順調に年をとっています。

年齢に関係なく、自分の考えが一番よいと思うのが人間です。自分の立場を通してうとして心を閉ざしてしまいます。

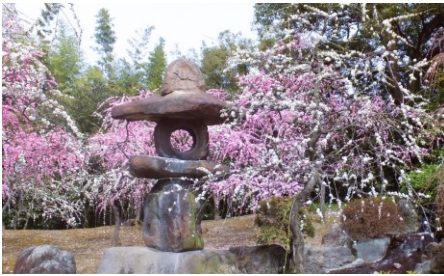
新聞の「人生相談」の欄にこんな投稿がありました。

「子ども達のために必死に生きてきました。そのため、今死んだとしても、恐怖も悔いありません。ただ長生きしてしまつて周りに迷惑をかけていることにも気づかなくなっていくことが怖いのです」と。

死に向かう準備として「終活」ということが流行しています。子どもに迷惑をかけたくないという親心のようですが、自分はこれまでの人生で、誰にも迷惑をかけていないという自惚れのようにも聞こえてきます。

明日どうなるか分かりませんが、ご縁をいただいて生かされている尊い命です。この世には自分一人の力だけで生きている人はいません。縁あって親子となったのです。兄弟姉妹、夫婦、知人となったのです。これは自分の努力でこしらえた世界ではありません。お互いが支えあう関係にある事実を新聞の相談者は忘れているように思えます。自分の考えと縁ある人の思いとは同じではありません。

自分の考えだけが全てだと思うのがおごりの心です。私たちは世間の習慣や流行の中に沈んでいます。沈むと周りの世界が見えなくなり出口がありません。孤独にもなります。「あたりまえ」の生活は大事なことを見過ごしてしまいがちです。



自分の人生を考える時に二つの見方があります。生きている今から死に向かう自分という「あたりまえ」の見方です。もう一つは仏さまが教えてくださいます。この世の死を超えた生というところから今の自分を見るのです。この立場では「終活」は不要です。

親にも二種あります。この身体を生んでくれた親と、心の親がいます。心の親は阿弥陀さまです。浄土真宗ではこの仏さまを「親さま」と親しみをこめて呼んでいます。

「父母に呼ばれて 仮に客にきて 心残さず 帰るふるさと」と古人は詠んでいます。

ふるさとは、死んだり別れたりのない世界です。右往左往するだけの人生ではさみしすぎます。人間は自分の「生きざま」を残すだけです。命が終わるその先に何を見て生きているかを問うてみましょう。

「南無阿弥陀仏」とよぶ声は、親のよぶ声、子のしたう声です。親の呼び声を心に聞きながらリラックスしましょう。

南無阿弥陀仏

念仏奉仕団参加二十回

渡辺 和子



長年お寺の行事・法座に出向く母をいつも何気なく見守ってきました。高齢になった今でも毎月カレンダーに法座の日を記入し、他に予定が入らないよう気を付けて出かけていきます。時には気分や体調が少し優れない日でも、何故が聴聞から戻った母は、不調も吹き飛んだように晴れ晴れとした顔つきでその日の出来事をいつも楽しそうに話してくれま

す。

信行寺さまより母の本願寺念仏奉仕団参加二十回の記念なので、一緒に参加しませんでした。母は奉仕団に参加することを以前から楽しみにしており、コロナ禍で行けない時でも、口癖のように二十回の奉仕団が終わるまでは元気でいなか



ればと言っていました。だから今回は一緒に参加し、そばで見守ってみようと親子で参加させていただきました。荘厳な本願寺さまでの見るもの聞くもの体験するものすべてが初めてのことで少々緊張していた私に、母は生き生きとこれまでの経験と本願寺さまの説明をしてくれました。参加二十回記念の表彰にもそばで一緒に受けることができ、母の晴れやかな顔を見れた忘れられない貴重な二日間を過ごさせていただきました。

今回皆さんからお寺での話などを伺うことができ、母は本当に楽しんで信行寺さまに長年出かけていたのだと改めて感じました。これまでも何かイヤなことがあった時でも、法座や門信徒さんとの交流で癒され心の拠り所にお寺がなくなっていたのだとありがたく存じます。長年の良きご縁をこれからも見守っていき

たいと思います。



「確かなもの」

住職

この世の中に確かなもの、変わらずに存在し続けるものはあるのでしょうか？確かなものは何もない、と釈尊はおっしゃいます。しかし私たちはその事実を真っ直ぐに受け取ることができずにいます。全てが変化の連続で動き続けているのが諸行無常の世の中です。年を重ねるたびに若い人もいずれ老いを感じるようになり、元気なひとと突然の病に倒れることもあります。地震など自然災害によって町や人の命が奪われることさえあります。ですから先のことは分からないというのが真実だと言えるのですが、私たちは安心安全なものを築くために社会や町をつくり、また医療や福祉などを発展させて老いや病など人生における不安をなくそうとしてきました。その不安が完全にはなくなることはないにしても、そのことで多くの人が助かったと思います。しかし仏さまからみれば、まるで砂の上に立派な城を築いているようなものです。土台がしっかりしていないわけですから、いくら努力して作り上げたとしても崩れてしまう可能性を常にはらんでいるのが私たちの人生なのです。生老病死の苦しみから離れることができない存在であることを釈尊は初転法輪で最初にお説きにな

りました。それを否定する人は誰もいませんが、頭で理解するのと我が身のことと引き受けるのは別問題です。

この世に生を受けたからには皆必ず死んでいかなければなりません。遠い先のことのように思っていますが「今日とも知らず、明日とも知らず」と白骨の御文章にあるのがいのちの本当の姿です。今生きていることが当たり前ではなく、釈尊が「死の縁無量なり」といわれる人生でありながら、無事に生きていることのほうが奇跡なのです。自分の心臓が動き、息をしていること、どれも私の努力でしている世界ではなく、いのち自然のはたらきによって有難くも生かされているわたしたちであります。

「火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」（歎異抄）

私たちの住む世界は火のついた家が燃え崩れ落ちていくような無常の世界で、とても安心して住める状況ではありません。真実とよべるような確かなものはなく相対的虚構の世界でしかありません。しかし、そんな世界に生きる私に如来大悲の心が絶対的真實の言葉となつて、常にはたらくにつけてくださるのが南無阿弥陀仏のお念仏なのです。常に我を照らす如来さまのお慈悲を「大悲無倦常照我」と正信偈のお言葉で味あわせていただきます。

「念仏セツション」

米田 空城



この度三年間在籍した龍谷大学大学院実践真宗学科を修了します。昨年『信行寺報恩講』

の法要の後、礼拝堂で私自身の研究テーマの一つとして「念仏セツション」を開催しました。念仏セツションは、一人でも多くの方に念仏に親しみを感じていただき、お寺にお参りする機会のきっかけになれば、また、どなたでも気軽に参加できるようにという思いから企画しました。内容は、太鼓などの民族楽器を全員で一緒に叩き、輪になって念仏を称えます。当日は二十代から八十代の幅広い年齢層の方に参加していただきました。初めはどうしていいのかわからなかったり、戸惑ったりする方もいましたが、最後は楽しかったという声をたくさんいただきました。嬉しかったです。普段の生活とは違った時間、念仏を共に一緒に称えるという場を持つことで、つい忘れがちな「阿弥陀様の救いの中で生かされている」ありがたさを私自身が改めていただく機会となりました。

親鸞聖人が言われる念仏とは、浄土真宗の御教えを聞いて、まさに私が救われていく存在であったことに気づかされ「報恩感謝の念仏」が口から溢れてくるものであります。念仏をたくさん称えたから救われていく、そのようなことではないのです。念仏セツションに参加したから、たくさん念仏を称えたから、善き事をした！というわけでもないのです。私たちは、すでに阿弥陀様に救われていく身であり、日常生活もその救いの中にあり、悲喜交々の暮らしの中の「感謝の念仏」こそが浄土真宗の念仏です。

私は、今後も念仏セツションの開催を続けていきたいと思っております。少しでも多くの方に念仏の繋がりが広がっていきますように、ぜひ気軽な気持ちでお寺に足を運んでいただけますようにという思いからです。少しでも日々の時間から離れて、様々な縁の中で生かされているのだな、と自分と向き合うきっかけとなりましたら幸いです。たくさんの方の声明が重なり、調和していく念仏セツション。世代を超えてつながっていきますように。

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、五月の言葉の説明をします。



仏さまの光に
照されて
私の心に
明りがつく

今月の言葉は、「浄土真宗を語る」に掲載されている対談中の山本仏骨（やまもとぶつこつ）和上の言葉です。

行信教校教授、本願寺派勸学、龍谷大学教授、本願寺派伝道院院長を歴任され、大阪東淀川区にある定専坊住職を務められました。毎年行信寺でもご法話して下さいました。

浄土真宗の信心は、「安心せよ必ず助ける」という仏の仰せだから、それをいただく信心は「きつと

助かる」と安心することだ、と仰せを聞き受けるのが信心であります。

対談の中で、「親鸞聖人は信心を『遇う』とか『聞く』という言葉で顕されていますね。だから信心ということは、仏さまの光に照らされて、私の心に明かりがつくことだというように味わうと、一番有り難いんですよ。」と話されています。

お念仏を称える時、そこに仏の心が通い、仏の光に照らされているのです。常に浅ましい煩惱を起こす自分を恥ずかしく反省せしめられます。こういう自分のためにはたらいてくださるご恩をよろこび生きていくことが大切です。

仏さまの光は、いかなるささやかな生活の中にも一人ひとりの中に生きているのであり、光っているのです。



日頃の疑問を考えよう

Q 古い写真がたくさんあるのですが、私が亡くなったら子ども達もどうすべきか困ると思います。だから処分しておきたいのですが、ゴミとして捨てるのは忍びないのです。どうするのがよいでしょうか？

A そうですね。確かに思い入れのあるものを燃えるゴミと一緒に捨てるのは、なんだかよくない気がしてしまいますね。生前に棺桶と一緒に入れてほしいと子どもに伝えておくのはどうでしょうか。後に残すと迷惑がかかると思ってしまうですが、誰もがお世話になることです。後の者に任せる、伝えていくことも必要でしょう。

また、仏教ではお焚き上げ、故人の思い出の品を焚き上げることで故人に返す儀式があります。火で燃やすのも一つの方法でしょうか。お寺でも満中陰の法要が終えた後、白木の位牌は引き取ってお焚き上げています。

仏壇・仏具・写真など使わなくなったものをどう処分すればよいかと相談されることもあります。タンスなどと同じように考えれば粗大ゴミとなるわ

けですが、やはり、閉眼法要（性根抜き）を行い仏具屋さんなどに引き取ってもらうのがよいでしょう。

これはどうすべきというよりは、人間の心の問題ともいえるかもしれません。仏事に関して、教えより形式が伝わった現状があるようにも思います。例えば、葬儀会館に行くと清め塩が置いてあります。どんな意味があつて、どのような心で使うのでしょうか。清め塩は、仏教とは関係ないことです。これは死をケガレと見なし、死者のタタリを恐れる考え方に由来するようですが、そのように考えること自体故人に対して失礼であるといえます。また、中陰が三カ月にまたがるとよくないという人もいます。三カ月を身つき、四十九日を始終苦と語呂合わせ、始終にわたって苦しみが、死を穢れと考え、身につくと考えられます。

当然意味があつて伝わっていることも多いわけですが、そこにどのような教えが、心があつて伝わっているのかを理解して行うことが大切です。



信行寺行事予定とご案内



春の彼岸法要

三月二十三日（土） 住職
二十四日（日） 前住職
両日とも午後二時～三時半ごろ

第二十二回 門信徒会総会

四月二十七日（土） 午後二時より
おつとめ・総会・法話

花まつり

四月四日（木）
読み聞かせや住職のお話、いたやど保育園
園児さんの歌などを予定しています。
詳しくはお寺まで問い合わせください。

編集委員より

令和六年（二〇二四年）元旦、思いもよらない北陸地方大地震が起きました。驚きで心が締め付けられました。私達は、ふと阪神淡路大震災を思い起こしたのではないのでしょうか。大変な思いをされている方々、負けない心で頑張っていたきたいです。

今回初法座には久しぶりに参加させていただきました。ご住職の法話の後、尺八の演奏を聴かせていただき、ピアノと馬頭琴の演奏で皆様と一緒に歌を歌いました。

日々、何事もなく過ごさせていたただいていることに感謝し、有り難く感じています。楽しい一日を過ごさせていだきました。

南無阿弥陀仏

新田 光美

